

名大の時間

ゲートボールから連携や地域との協働を考える

な連携教育科目「地域との協働Ⅱ・Ⅲ」でのチーム活動では今年度初めてゲートボールを取り入れ、60名の学生が参加しました。全員が初心者でしたから、活動をより楽しめるように、現在の日本ゲートボール連合などでの標準的な対戦方式ではなく、40年ほど前に釧路の一部地域で行われていたロカル・ルールに則って行いました。

「とても狭いコートで、第1ゲートまでの距離も1〜2メートルに近づけ、初心者がゲートを通過できないときは2度打撃してよい」「勝敗は得点制ではなく、味方チームのボールを相手チームよりも先にゴールのボールに当てたチームが勝ち」「ラインから出たボールに当てられたら即、出戻りで、最初からやり直し」「試合時間は無制限で、ボールは10秒以内に打撃しなくてもよく、チームで作戦を思う存分考えて進めてよい」など、できるだけゲームを面白くすべく、実施しました。

こうして、大学生でも頭脳と身体技能をフルに駆使し、学科や年齢を超えた多様な仲間と親和的にコミュニケーションを図りながら、良好な信頼関係のなかで、楽しんでプレイすることのできる軽スポーツ、レクリエーションとなるよう工夫を重ねました。夏場は屋外グラウンドで、雨天時と冬場は屋内の広い教室で、1人90分ずつ5回の活動を体験しました。

この結果、栄養・看護・社会福祉・社会保育という4学科の学生と教職員が混成チームで交流することや、一度も繰り返すなを何度も繰り返すなかで、たんに試合を

楽しむだけでなく、連携と協働がないと勝利できないゲートボールという団体競技を通して、実際の専門職連携や地域との協働に関しても理論的に、より深い考察へと各人が至り、



大成功でした。まったくの初心者でも、運動が苦手でも、ときには大活躍ができて、前頭葉機能の活性化と運動不足の解消を促せるゲートボールは、世代間交流のツールとしても、もっと地域に普及させたいと思われた1年でした。

社会保育学科教授

糸田尚史